

司式:大谷 昌恵  
奏楽:橋本恵美子

前奏:「我らが悩みの極みにある時」(J.G.ワルター)

招詞:14娘シオンよ、声をあげて喜べ。わたしは来て、あなたのただ中に住まう、と主は言われる。17すべて肉なる者よ、主の御前に黙せ。主はその聖なる住まいから立ち上げられる。(ゼカ2:14、17)

讃美歌:2「聖なる神は」

交読詩編 103:1-13

- 01 【ダビデの詩。】わたしの魂よ、主をたたえよ。わたしの内にあるものはこぞって/聖なる御名をたたえよ。
- 02 わたしの魂よ、主をたたえよ。主の御計らいを何ひとつ忘れてはならない。
- 03 主はお前の罪をことごとく赦し/病をすべて癒し
- 04 命を墓から贖い出してください。慈しみと憐れみの冠を授け
- 05 長らえる限り良いものに満ち足らせ/驚のような若さを新たにしてください。
- 06 主はすべて虐げられている人のために/恵みの御業と裁きを行われる。
- 07 主は御自分の道をモーセに/御業をイスラエルの子らに示された。
- 08 主は憐れみ深く、恵みに富み/忍耐強く、慈しみは大きい。
- 09 永久に責めることはなく/とこしえに怒り続けられることはない。
- 10 主はわたしたちを/罪に応じてあしらわれることなく/わたしたちの悪に従って報いられることもない。
- 11 天が地を超えて高いように/慈しみは主を畏れる人を超えて大きい。
- 12 東が西から遠い程/わたしたちの背きの罪を遠ざけてください。
- 13 父がその子を憐れむように/主は主を畏れる人を憐れんでください。

朗読聖書①ホセア書 11:1-9

◆神の愛

- 01 まだ幼かったイスラエルをわたしは愛した。エジプトから彼を呼び出し、わが子とした。
- 02 わたしが彼らを呼び出したのに/彼らはわたしから去って行き/バアルに犠牲をささげ/偶像に香をたいた。
- 03 エフライムの腕を支えて/歩くことを教えたのは、わたしだ。しかし、わたしが彼らをやしたこと/彼らは知らなかった。
- 04 わたしは人間の綱、愛のきずなで彼らを導き/彼らの頸から轡を取り去り/身をかがめて食べさせた。
- 05 彼らはエジプトの地に帰ることもできず/アッシリアが彼らの王となる。彼らが立ち帰ることを拒んだからだ。
- 06 剣は町々で荒れ狂い、たわ言を言う者を断ち/たくらみのゆえに滅ぼす。
- 07 わが民はかたくなにわたしに背いている。たとえ彼らが天に向かって叫んでも/助け起こされることは決してない。
- 08 ああ、エフライムよ/お前を見捨てることができようか。イスラエルよ/お前を引き渡すことができようか。アダムのようにお前を見捨て/ツエボイムのようにすることができようか。わたしは激しく心を動かされ/憐れみに胸を焼かれる。
- 09 わたしは、もはや怒りに燃えることなく/エフライムを再び滅ぼすことはしない。わたしは神であり、人間ではない。お前たちのうちにあつて聖なる者。怒りをもって臨みはしない。

朗読聖書②マタイによる福音書 9:1-8

◆中風の人をいやす

- 01 イエスは舟に乗って湖を渡り、自分の町に帰って来られた。

02 すると、人々が中風の人を床に寝かせたまま、イエスのところへ連れて来た。イエスはの人たちの信仰を見て、中風の人に、「子よ、元気を出しなさい。あなたの罪は赦される」と言われた。

03 ところが、律法学者の中に、「この男は神を冒涇している」と思う者がいた。

04 イエスは、彼らの考えを見抜いて言われた。「なぜ、心の中で悪いことを考えているのか。」

05 『あなたの罪は赦される』と言うのと、『起きて歩け』と言うのと、どちらが易しいか。

06 人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを知らせよう。」そして、中風の人に、「起き上がって床を担ぎ、家に帰りなさい」と言われた。

07 その人は起き上がり、家に帰って行った。

08 群衆はこれを見て恐ろしくなり、人間にこれほどの権威をゆだねられた神を賛美した。

祈祷

聖なる主なる神さま、聖名を崇め賛美致します。2月も半ばとなるこの日、今日もあなたは私たち一人ひとりに声をかけ新しい命を与えてくださいました。そして全てを整えて御前に礼拝を献げる民として、この場所へ、あるいはオンライン礼拝の場へと導いてくださいました。心より感謝致します。

神さま、12月のクリスマスから今まで、私たちは降誕節の歩みを進めて参りました。私たちのために神がその大切な独り子をお送りくださったことを喜び、その大なる感謝の思いと共に降誕節の日々を過ごして来ました。そして今週半ばの水曜日にはいよいよ『灰の水曜日』を迎え、受難節へと時が進んでいきます。私たちの罪の贖いのために、何の罪もない主が十字架の上で死んでくださったことによって私たちはその罪を赦され、永遠の命を与えられました。しかしそのために、主がどれほど大きな痛みと苦しみとを覚えられ、ご自分の歩むべき道を進まれたのかを思うと、私たちの心は大きな痛みに襲われます。『灰の水曜日』からの日々、特にそのご受難を覚えて歩む私たちを、神さま、どうぞお導きください。どのような時もあなたが傍に居てくださって私たちと共に歩んでくださることを改めて私たちに思い起こさせてください。

神さま、陽の光は少しずつ春に近づいていますが、まだまだ寒い日が続いています。私たちの群れの中にも、お歳を召している方、心と体に痛みを覚える方、その他この寒さに体調崩しておられる方もいらっしゃいます。どうぞ夫々の健康をあなたがお守りくださいますようにと願います。

神さま、今日のこの礼拝では佃雅之牧師が御言葉を取次いでくださいます。あなたがこの牧者を、この日の礼拝のために備えてくださったことに感謝致します。どうか佃牧師が聖霊に豊かに満たされ、御言葉を大胆に語ることができるようにお導きください。そして聞く私たちの心を開き十分に御言葉を受け入れることができるように備えてください。

また本日はこの礼拝後、2025年度の教会総会が開かれます。この1年の歩みを振り返りつつ、新しい年度に向けて、信濃町教会のこれからの歩みについて考える時を持ちます。神さまどうか、全ての議事があなたの御心に合ったものとなりますよう総会の時をお導きください。最初から最後まで、総会の場にあなたが居てくださいますようお祈りします。

今日、日本中、世界中の教会で献げられる全ての礼拝を、あなたが豊かに祝ってください。特に困難な状況にある教会、被災地にある教会、少ない信徒で礼拝を守る教会、牧者不在の教会の上に、豊かなお恵みを注ぎくださいますように。この感謝と願いの祈り、我らの主イエス・キリストの聖名を通して御前にお献げを致します。アーメン。

## 説教 「あなたの罪は赦される」

佃 雅之

マタイはこの福音書を通してイエス・キリストが権威を持つお方であることを描いています。権威という言葉は、上から押さえつける力、逆らえない命令、強い人が弱い人を支配する力といった印象を持たれがちです。しかしマタイが描くイエス・キリストの権威とは、人を縛る力ではなく、自由へと導く力、攻める力ではなく立ち上がらせる力です。その人の罪を赦し、病に苦しむ人を回復させ、孤立していた人を人々の輪の中へ戻してくださる、それがキリストの持つおられる権威です。

今日の出来事は、キリストが伝道の拠点とされていた自分の町カファルナウムで起こりました。自分の町とは、キリストが人々のことをよく知っておられる、また人々もキリストをよく知っていた場所です。そのような意味で言えば、自分の町とは今日の私たちにとっての教会を指していると言っているでしょう。教会もまた様々な人が夫々の事情や重荷を抱えてながら生きている所です。今日の聖書の箇所には、今の私たちの教会と重なり合う光景が描かれています。

人々が中風の人をキリストの下へ連れてきました。「中風」とは「麻痺」を意味する言葉です。この人は自力で起き上がることもできず、回復の見通しが立たない状態にあったようです。当時の多くの人々は、病気や不幸な出来事を何かの罪を犯した罰ではないかと受け止めていました。そのため病に苦しむ人は体の痛みだけでなく、自分は神から裁かれているのではないかという思いまでも心に抱えながら生きていたのです。この場面ですべて驚かされるのは、キリストが先ず目に留められたのは中風の人ではなく、「彼を連れて来た人々の信仰」であったということです。彼らは立派な信仰の言葉を語ったわけではありませんでした。「この人を癒してください」と願ったわけでもありません。病の人を担ぎ、「何とかしてキリストの下へ連れて行こう」と、その一心で動いたのです。キリストが目留められたのは、「弱さを抱える人を一人きりにせず、共に支え、共に歩もう」とする人たちの信仰でした。この姿こそ、時代が変わっても尚、主が教会に求めておられる姿であります。主を信頼して主に近づく、人からどう思われるか、自分がどう見られるかは脇に置いて、ただ「イエスよ、あなたの下へ」、この一心で近づいていく、その姿の中にキリストは信仰を見出してくださったのです。私たちが全てを委ねて主に近づくとき、主は奇蹟を成し遂げてくださいます。「あれができたから」、「これが言えたから」、「立派な告白ができたから」ではありません。「ただ、ご自分に向かって来る者を、必死に身をもって近づいて来る者」に主は深い憐みを注がれるのです。私たちはどうでしょうか。主の下に行きたい、主に近づきたいという率直で素直な、しかし最も大切なその願いを、いつの間にか失ってはいないでしょうか。

キリストは中風の人に「子よ、元気を出しなさい。」と語り掛けられました。「子よ」という語り掛けは、とても「親しみのこもった語り掛け」だと言われています。この呼びかけこそが、既に救いの始まりでありました。キリストはこの人の一番深い所にある痛みをご覧になっていました。それは体が動かない痛みだけではなく、先の見えない不安、人に迷惑をかけているのではないかという思い、自分は役に立たない存在なのではないか、様々な思いが心を覆い生きる気力を奪っていました。キリストはそのような彼の思いの全てをご存じであったのです。だからこそキリストは「元気を

出しなさい」と言われます。この言葉は、「頑張れ」という激励ではなく、「大丈夫だ、安心しなさい」という意味の言葉です。また同時に、「わたしを見なさい」という招きでもあります。救いも、希望も、私たち自身の内側からは生まれるものではありません。主を見上げるところから与えられるのです。信仰はキリストが私たちに触れ、語り掛け、関わってくださるところから始まります。聖書を十分に学び、全てを理解し、迷いがなくなってから主の下へ行くのではなく、分からないことがあっても、不安を抱えていても、そのまま主の下へ近づけばよいのです。主が触れてくださることを信じて、主が語ってくださる言葉を待ちながら、信頼して身を委ねる、そこに救いの始まりがあるのです。

中風の人に続けてこう言われます。「あなたの罪は赦される」、キリストは条件を一切付けることなく、先に赦しを与えられるのです。この主の言葉は私たち自身が既に赦された者であることを思い出させてくださいます。自分が赦された存在であると知るとき、はじめて私たちは人を赦す者へと変えられていくのです。人を赦すということは相手の罪を軽く見ることで、なかったことにすることでもありません。それはキリストが私たちの罪を背負い十字架を担われたように、人の罪の重さを自らが引き受けることなのです。「赦す」とは相手を裁く権利を手放し、その罪によって生じた痛みや損失を自分の側で担うことです。だからこそ、「赦し」は苦しみを伴います。この苦しみを完全に引き受けることができたお方が、ただお一人、イエス・キリストです。キリストは私たちの罪を背負い、十字架においてその全てを担われました。命をかけた「赦し」なのです。

人間は何故人を「赦す」ことができないのでしょうか。私たちはどこかで自分の正しさを握り締めています。傷つけられたのは自分だ、自分は間違っていないという思いによって自分を守ろうとします。誰にも分かってもらえなかった痛みの中で、自分の正しさを支えようとしてしまいます。「赦す」ということに怖さを感じることもあります。まるで自分の立場や存在を失うように感じるからです。私たちは誰かを赦そうとすると、どこかで条件を求めてしまいます。謝ってくれたら、自分の非を認めてくれたら、その思いはいつの間にか相手を裁く側に立たせています。私たちは、誰が正しいのかを自分で決め、まるで裁く権利が自分にあるかのように振舞ってしまいます。けれども聖書は、「裁きは神のものだ」と語ります。主は「わたしに任せなさい」と言ってくださるのです。

聖書を読み続けていくと次第にはっきりしてることがあります。それは、聖書の中心にあるのは「神の愛と人間の罪である」ということです。聖書の中で人間は何度も神から離れ、神を忘れてしまう存在として描かれています。それでも神は人間を見捨てることなく、何度でも呼掛け、立ち返る道を備えてくださいます。この神の一方的な愛こそが聖書全体を貫いているメッセージなのです。

本日、私たちに与えられている旧約聖書ホセア書 11 章は小見出しにある通り、神の愛が大生々しく、そして胸を打つ形で語られている箇所です。神ご自身の口から、父が子を思うような切実で痛みを伴った愛が語られています。ここで描かれている神は、遠くから審きを降す方ではありません。子を抱き、手を取り、歩ませ、それでも背を向けていく子を、なお見捨てきれない父の姿がそこにあります。人は神の愛を受けながらも、繰り返し、繰り返し神に背いてしまいます。それでも神は私たちを愛することを止められないのです。神は正しいお方です。罪をそのままにしておくことは為

さいません。しかしその正しさの奥底にあるのは、滅ぼそうという思いではなく、なお救おうとする愛なのです。私たちの神は断ち切る神ではなく、取り戻そうとされる神です。見捨てる神ではなく赦し続ける神です。この神の本質をキリストは託され、私たちのところへ遣わされました。キリストはホセア書に記されているように、滅びの中から救い出してくださる救い主なのです。福音書に記されているキリストの奇蹟は、病を癒すことに留まらず、罪の赦しと深く結びついています。キリストの赦しは神との関係を回復し、人を本来あるべき姿へと立ち返らせる救いの徴です。

しかしここに居合わせた律法学者たちにとって、キリストの罪の赦しの宣言は神への冒瀆と映りました。罪を赦すことは神一人の為さることであり、人間が口にしてよい言葉ではないと彼らは固く信じていたからです。そのために、キリストが神の権威を奪い取ろうとしているように見えたのです。キリストは彼らの心のつぎやきを見抜かれ言葉を語り続けられます。「『あなたの罪は赦される』と言うのと、『起きて歩け』と言うのと、どちらが易しいか。」この主の問いは何を語っているのでしょうか。「罪は赦された」といっても、それは人の目には見えません。しかし「起きて歩け」と言えば、結果はすべて明らかになります。“主は目に見える癒しを通して、目には見えない癒しの権威を示された”，ということです。

キリストが言われます。

「人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを知らせよう。」

「人の子」とは、私たちと同じ人となられたイエス・キリストです。苦しみを知り、悩みを知り、涙を知っておられるその方が、地上で罪を赦す権威を持っておられる、ここにこの物語の中心があります。

キリストは中風の人を立たせ、歩ませ、新しい生活へと送り出します。その光景を目の当たりにした群衆は「恐ろしくなった」と記されています。神が生きて働いておられる、その現実に、律法学者たちは恐れを覚えました。

この礼拝の後に行われます教会総会もまた、キリストの権威の下に置かれています。総会は人間の思惑や力関係によって動く場ではなく、夫々が主の前に立ち、自分の思いを率直に語り、そして共に御心を尋ね求める時です。語り切れなかった思いが後の残るのではなく、その場で主の前に差し出されていくとき教会は守られます。

今日の個所の最後に「人間にこれほどの権威をゆだねられた神を賛美した」と記されています。ここで用いられている「人間」という言葉は単数形ではなく複数形です—<Μη·ἄνθρωπος(τοῖς ἀνθρώποις)> [与男複 冠詞(この、その) 人間]—。それはこの権威がイエス・キリストお一人にのみではなく、キリストを頭とする群れへと委ねられていくことを示しています。キリストは赦しの恵みをご自身の体である教会に委ねられました。キリストが既に成し遂げてくださった赦しを、言葉と行いをもって告げ知らせ、人をその赦しの中へと招く群れ、「人間」という言葉は、赦しの福音を託された教会の姿を指し示しています。だからこそ、教会は自らを誇るのではなく、神を賛美し歩み行くのです。キリストは何時も教会の信仰を見ておられます。主は私たちが赦された恵みに生きる者として、互いに赦し合う歩みへと導いておられるのです。私たちが愛し合い、弱さと罪を担い合う時、主の体である教会はこの地上に形づくられていきます。

“中風の人を主の下へと運んで行った人々の信仰”、“悩みを抱える者を主の御前へと連れてくる信仰”、それこそが教会に託された使命、即ち伝道です。私たちは人を

説得するのでも、無理に変えようとするのでもありません。ただ主の御許へと運ぶのです。キリストの下へ人を運ぶ者として、またキリストの言葉を運ぶ者として今も用いられています。「子よ、元気を出しなさい。あなたの罪は赦されている」、このキリストの言葉を全身で受け止めて私たちもまた「起き上がり」、それぞれの生活場へと遣わされて行きましょう。

お祈りを致します。

聖なる神、罪を赦し、病める者を立ち上がらせ、絶望の中にある者に希望を与えてくださる救い主イエス・キリストの聖名を心から賛美致します。どうか主よ、私たちが何時もあなたを見上げて生きる者でありますように、あなたが私たちの罪を赦してくださいましたように、私たちが互いに赦し合い、愛し合うことができますように、私たちを用いてあなたの肢体である教会をこの地上に確かに形作らせてください。

主の聖名によって祈ります。アーメン。

讃美歌:402「いとむととき」

献金・感謝(二神康郎)・主の祈り(讃美歌21 93-5A)

天に居ます我らの父なる御神さま、感謝致します。今日は輝かしい朝を迎え、同じ肢に繋がる兄弟姉妹と共に、それぞれの家庭や、また礼拝堂に集められ、賛美の礼拝を献げることができましたことを感謝致します。

今日は講壇を通じ、“主を信じて近づきなさい。そうすれば赦される。”ということを変更して示されました。どうか、今日示されたものを心の糧として一週間を過ごすことができますようにお導き下さい。この後、持たれる教会総会の上にあなたのお導きをお願い致します。

我々に与えられました物の中からほんの僅かを御前に献げました。どうか御用のためにお使ください。

主に教えられました「主の祈り」を共に祈りたいと思います。「主の祈り」…アーメン。

派遣:讃美歌92「主よ、わたしたちの主よ」

祝福:主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたが一同と共にあるように。

アーメン。

報告:週報通り。

後奏:「ああ主よ、哀れなる罪人なる我らを」(J.B. パツハ)